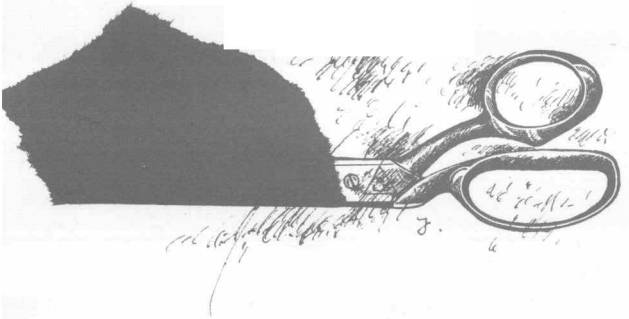

蛇淫　©1976

昭和五十一年五月二十二日　初版印刷
昭和五十一年五月二十八日　初版発行

著　者　中上健次
発行者　佐藤晧三
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三―八
電話　(〇三)二九二―三七一一
振替　東京一〇八〇二

印刷　三松堂印刷
製本　大口製本

日次

蛇淫　5
荒くれ　33
水の家　83
路地　119
雲山　153
荒神　179

裝幀　吉原英雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

蛇淫

蛇淫

女は泣きもしなかった。平然としたものだった。蛇口につけた短かく切った青いホースの先をつかみ、水を流しながら、粉石鹸をまき散らし、浴場のタイルをこすった。スカートをまくりあげ、かがみ、こするたびに女の髪は揺れる。鼻唄さえ出かねないようだった。粉石鹸のあぶくが衣服に着かないように彼は、すそをまくりあげた。毛臑が、獣じみてみえた。手をのばして、蛇口を満開にした。「あかんよ、もうちょっと緩くして」女は言った。「水がはねたら、また洗わんならん」

「どうせ焼棄てならんのやったら、水ぐらいとんでもかまん」

「気色悪りやんか」

「いっぱい出たわけでなし、ちょっとだけやないか」

「ちょっとやけどな」女はそう言って立ちあがる。蛇口をしめ、ホースの先をつまんで、水の勢を加減してあぶくを洗い落とす。浴槽の中をのぞき込む。「あんた、そうやけど、えらいことしたなあ」彼をみる。「しょうない……」彼は答える。吐き気がする。父は、ほとんど無傷のまま

にみえる。血は、母の額から流れ、首筋、腕、それにスカートについている。スカートはめくれあがり、太ももとパンティがみえる。母の性器の形がパンティに浮いている。浴槽に女と二人がかりで放り込んでからか、それとも、諍い、額を灰皿で殴りつけられた時、思わず小便をでももらしたのか、濡れている。母の性器、それも、女のように昂ぶると濡れたのだろうか？　ふっと、彼は思う。女は、いつも、パンティの上からでも指で触れるとわかるほど濡れている。吐き気がする。彼は、眼をそらす。粉石鹸のあぶくは、浴室の電灯の光を受けて、赤く黄色くみえる。あぶくは女の足もとにもくっついている。女が動くたびに、あぶくはさらにくっつき、不意に足首から離れ落ちる。水があぶくを消す。女は、体をかがめ、ガスの点火口の横に落ちた風呂蓋をひろい、浴槽にかける。棺桶か、と彼は思う。

居間のテレビが、つけっ放しだった。消した。そこで、緑のカバーオールを脱いだ。流行のものだった。パンツも脱いだ。それで素裸だった。体が、へんにごつごつしてみえた。父親ゆずりの、どん百姓の体だ、と彼は思った。いや、どん百姓以下の、材木かつぎの、食う物がなければ、なにを殺してでも食うという体だ。母が、彼にそう言っていた。こえだめのそばにわざわざ埋めた牛の死骸を掘りおこしてでも食い、生きのびる体だ。だが、この体が、お宝さ。彼は思う。女は、この体に泣く。そんじょそこいらの、色白の小男の、うじうじいじけた連中や格好だけいっぱしの連中と一緒にされたらたまったものではない。彼は、裸のまま、部屋に入る。なにもかも、焼き棄てる、と思う。いっそのこと、この家も、スナックもだ。それが、正解だ、と彼は思った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

女が、部屋に入ってきた。まだ、そのままの服だった。女は、青ざめていた。「脱いでしまえ」と彼は言った。女は、気抜けて、ソファに坐り込んだ。何度目かの改築の時、建て増しした彼だけの部屋だった。ここ三カ月ほど、この部屋で、女と寝、性交した。母親は、女が入り込んだと言ったが、むしろ彼が、女を引っ張り込んだのだった。二六時中、性交していた。母親がいる時は、彼がやっているスナックから持ってきたレコードをかけた。ダウンタウン・ヴギウギ・バンドの「スモーキングブギ」は傑作だった。糞して一服、そしてまたベッドで、一服、そのくだりにさしかかると、四チャンネルステレオの、ボリュームをいっぱいにした。

女は、うなだれていた。みたくなかった。ベッドから、起きあがり、女の首筋をつかんだ。

「いや」と彼の手を払った。

「ほら、はよ、脱げ、どつくど」彼は言った。

「順ちゃん、こんなこと」女は言う。

「いっつもやっとることやないか、なんじゃ、いまさら。邪魔するもん、おらん」

「ちがうよお」女は首を振る。髪が揺れる。「おそろしのお、なんでこんなことしてしもたんかあ」

「おまえが考えること要るかあ」女のその髪が眼の前で揺れるのが不愉快で、彼は髪をわしづかみにする。引き抜くように力を入れる。女は、ソファごと、床に横倒れになる。「ほら、はよ脱げ、裸になれ」彼は言う。女は、のろのろと身を起こす。足で蹴りつけたくなる衝動が起こる。

彼は、ベッドであおむけになる。女は、坐ったまま、ブラウスを脱ぐ。立ちあがって、スカートをはずす。身をかがめて、パンティを取る。女は、服を着ている時よりも、体は大きくみえる。

原因など、ことさらなかった。元々、彼はグレていた。この町一番の不良だった。それが改悛した。最近になって、両親から国道沿いにスナックを出してもらった。十七、八のチンピラが、彼を兄貴、兄貴と呼んで集まった。地まわりの連中も集まった。なにもかも、そのスナックが取りもつ縁だった。ウエイトレスに、彼は、幼なじみを、頼んだ。それが、この女だった。女とは、環境も境遇も、まるっきり違ってしまっていた。女は、まだ昔の、駅裏の、どぶがにおいたてる路地に、住んでいた。靴職人の父親は、死んでいた。母親はアル中だった。これもアル中の男を、引っ張り込んでいた。女は、パチンコ屋に住み込んでいた。女をくどき落して、スナックのウエイトレスに呼び、女がアパートに移る時、彼は女について、その家まで行った。女の母親は彼の顔をみるなり、「えらいあんじょう行てええねえ」と言った。「おまえも、賢うして、まじめになれよ」と彼に言った。それから玄関の柱に手をつき、坐りこみ、眼から涙をあふれさせる。「父さんも母さんも、一生懸命、おまえのため思て働いて金ためとるんやから、おまえがグレたりしたらあかん。どんなに腹立っても、人なんか刺したらあかん」母親は首を振る。女が、「泣き上戸なんよ、お母ちゃんは」と弁解する。

「もう足洗ろた」彼は言う。母親は、涙でぐしゃぐしゃになった顔をスカートでぬぐう。それが

女にはバツが悪かったのか、ぶよぶよした畳を踏んで中に入っていく。押入れをあける。
「ボストンバッグどこへ置いたん？　ないよお」と声を出す。母親か、その男が、売り払ったりでもしたのだろうと思った。いまから思えば、その駅裏の路地に、彼の父や母が住んでいたことが不思議だった。家々のほとんどは、バラック同然だった。傾きかかっていた。子供たちが、路地の入口に止めた彼の車を取り囲んでいた。車には、釘でやったものらしいひっかき傷がある。どういう訳か、その時、怒る気がしなかった。女を傍に乗せ、すぐ、その場を離れた。
女にアパートを借りてやるのは当然だ、と彼は思った。母親が男と一緒に暮らしている家を出て、パチンコ屋に住み込んでいることだし、女一人で敷金、礼金、周旋屋の謝礼金を用意できるはずがなかった。すべて彼が出した。いや、彼のスナック「キャサリン」が出した。
女は、スナック「キャサリン」で働いた。最初、客は女目当に集まった。店をしまう時分、客が入っていない時、女は、昔の思い出ばなしをした。彼は覚えていなかった。「あんたねえ、なんせから告げ口したんよ」と女はわらった。彼が入れてやったコーヒーを一口すすり、カウンターに置き、また一口すする。「なんせから順ちゃんの家の、便所のくみ取り口に、いちじくが植ってたん。もうこれは、絶対に確かやから。わたしが一つ盗ったの、お母ちゃんに告げ口したの。はっきり覚えとるよ、お母ちゃん、いまでこそ酒ばっかし飲んでああやけど、お父ちゃん生きとるときは、あれできびしいからな。耳のあたりぶたれて、わたしの右耳ほとんどきこえんもん」
「嘘じゃ」と彼は言う。いちじくの木など覚えていない。

「ほんとにぶちのめされて、いまでも右耳あかんのよ」女は、言う。カップを置き、髪をかきあげ、右耳を出す。「いまのお母ちゃんから考えたら、そんなこと嘘みたいにみえるけどなあ」
「嘘、嘘」と彼は言う。
女は、立ちあがる。七坪ほどのスナックだった。カウンターの部分だけ残して、他は照明を消していた。国道を通る車が見えた。外の照明はついていた。女と交替して、洗い物をやらせ、スナックの材料を明日も使えるかどうか点検させた。その時、父と母が入ってきた。「どうや、うまい具合に行ってるかあ」と父は言った。母は、よいしょとソファに腰を降ろした。酒に二人とも酔っているらしかった。母は鼻歌をうたっていた。「えらい不景気やから、この商売もむつかしやろ」父は、彼の隣りに坐った。「まあな、なんでもかまん、やってみるこっちゃ。不景気なのは、どこでもそうじゃから」
彼は立ちあがって、父におしぼりを取ってやった。父はそれで顔をぬぐい、首筋をこすった。母が立ちあがり、ふらふらとカウンターに来てよろめき、彼の背に手をあてた。洗い物をしている女に、「ケイちゃん、おばさんに、なんでもかまんから一杯くれる?」と言う。歌うように「水でも、酒でも、コーヒーでもう」と言い、どっこいしょと声を掛け、父の隣りに坐った。父に今度は、腕をもたせかける。女は彼の顔をみる。「水でええ、水やったらええ」彼は言う。
「なんや人を牛や馬みたいに言うて」母は、彼の背中をばんとたたく。「ケイちゃんの自慢のコーヒーをおばさんに入れてよ」

「おばさん、ええ機嫌ねえ」女は言う。水道をとめる。アルコールランプを出し、火をつける。
「ええ機嫌よお、おばさんは。いつも、ええ機嫌よお」
「どうや、もうスナックになれたかい？」父が訊く。「そんだけの器量よしやったら、すぐ若い男らが、ケイちゃん目当に集まるやろ？」
「あんたが目当にしてるのと違うのお？」母は顔を起こす。
「あほぬかせ」と父が母をこづく。含みわらいをし、母は、父の腕に顔をもたせかける。「そんなことはあきませんよお、なあケイちゃん」それからまた顔をあげ、「順がこのスナックを出す、と言うた時、後押ししたの誰やと思う？　このわたしよ。他でもない、このわたし。ケイちゃんみたいなきれいな子おったら、若い子集まるやろ？　おばさん、どっちかと言うと、順みたいな子でなしに細面の子が好きやねん。それでそんな子と、恋をしてなあ、女遊びばっかしするお父ちゃんも順もふりすてて、駆け落ちでもしてかましたろかと想っとるんよお」
「くだらんことばっかり言うて」父が言う。
「ほんまほんま」と父の腕に顔をこすりつけたまま言う。
「お父ちゃんになあ、金ができたからと言うて、女遊びばっかししとるとどうなるか、教えたろかと思てえ。その点、わたしは、順は見込みあると思うんよ。めったに女遊びせんし。グレとったけどな、いまは、まじめやから」母は彼の顔をみる。体をみまわす。「大事な跡取りやからな。女遊びするこの人に耐えてきたんは、みんな順の為やからなあ。破れ長屋の時代からや」母は顔

をあげる。声をひくめる。「どや、ケイちゃん、順は他の男とくらべて上手やろ?」女は、きょとんとした顔をしている。何をきかれたかわからない風だった。女はさりげなく、両耳にかぶさった髪をかきあげ、首をかしげる。「ケイちゃん、頼みがあるんやけどなあ、おばさんなあ、順はまだ赤子やと思とるん。昔から、乱暴者で喧嘩は強いけど、女のことあんまりつきあいもせんと来とるん。そうやんで赤子孕まんといてほしいんや」

「おばさん、そんなんと違うよ」女は、言った。

「わかってるよ、いまはそんなことになってないけど、将来や」

「いややなあ、わたし順ちゃんと恋人でもなんでもないよ。昔から順ちゃんと兄妹みたいに遊んできたけど。ちがう、ちがう」女はわらう。「順ちゃんと中学もちがうし、わたしすぐ大阪へ行ってたし、このあいだやもん、順ちゃんにばったり会うて、このお店手伝てくれんかと言われたの」

「あほなことばっかり言ってくさるんやったら、二人とも帰れ」彼は言った。

「順ちゃんが、わたしなんか見向きもしてくれんのやのに」

「なんやあ」母は気抜けしたように言った。

「自分の亭主の遊びだけ心配しとったらええ。おれのことまで心配いるか」彼は言った。

「いや、おまえに結婚話あるしな。母さんは、おまえの先々の事心配しとるんじゃろ。金あっても不動産あっても、結婚となると、どこからでも好きな女、引っぱってくるわけにはいかんし、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com